

二〇二五年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は22ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例:

--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の文章は、『源氏物語』を踏まえて作られた怪異譚^{たん}です。源氏が須磨へ去った後、頼る者もなく侘^{わび}しく暮らす「姫君」（末摘花^{すえつむはな}）のもとに、ある

日、源氏の従者^{これみつ}惟光^{これみつ}がやって来て源氏の訪れを告げます。姫君の侍従^{しじゆ}は、源氏が須磨から戻ったという話も聞いておらず驚きます。姫君が会おうとしなかったため、結局源氏は車から降りないまま帰り、翌朝緑の紙に書かれた文が届きました。これに続く次の場面を読んで、後の問いに答えなさい。

（源氏とこ）対面なさるだろうなどと女房たちが話し合っているところに
今宵ばかりは猶御対面^{なほたいめ}あらんやうなどを言ひ合はするほどに、山^{※1}の阿闍梨^{あざり}の君、このころ、院^{※2}の悩ましくせさせ給ふ御祈りに、請^{しやう}じ下ろさせ給ふが、

ふとまうで給へり。さし覗^{のぞ}き給ふより、うち見まはし給ひて、

1（このお屋敷に）
「この宮には、例ならぬ病者^{びやうざ}などやある」

と、問はせ給ふ。人々、姫君の昨夜^{よべ}より悩ましうせさせ給ふよし申すを、

（やはりそうか）
「さりや、よからぬ物の気配^{きはい}するを見つければ、罷^{まか}り過ぎがたくて、まうでつるなり。いかなる御悩みにか」

など、問はせ給ふほどに、御几帳^{きちやう}のはづれに、（先^{（先ほどの）}のお手紙^{てがみ}）
ありつる御文の巻かれたるを、目敏^{めざと}に見つけ給ひて、

「これ、まづよからぬ物なり」

とて、取らせ給ふを見れば、大きやかなる蓮葉^{はちすば}なりけり。侍従²、頭^{かしら}の毛も立ちて、

（いったい、どういうことでしょう）
「いかなるに」

と、わななき言ふを、

（姫君のお側近くに）
「かかる物、いかにしてか気近^けう参り来つる」

と、問はせ給ふ。

姫君も、この君おはしましつるを聞かせ給ひて、からうして御頭もたげさせ給ふ。阿闍梨の君、近く寄りおはすに、侍従、昨夜のことわななかし出で(阿闍梨の君)
(声を震わせながら説明した)

たり。君、

(いや、もう)

「いで、そこたちのものはかなきに、悪しき物の所得(我が物顔に)てふるまふにこそあれ。かううち荒れて人ひと気け少なき所には、狐などいふけだもの獣けだものらも、人の魂を侵し謀るわざするなり。悪しくしては、取られもするなり」

など、すくよかにのたまへば、姫君はむくつけく恐ろしとおぼす。
(すけずけと)
(気味が悪く)

※1 山の阿闍梨の君…姫君の兄。比叡山の僧。

※2 院…朱雀院。

問一 ——— 1 「この宮には、例ならぬ病者などやある」と聞いたのはなぜですか。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 姫君の性格では具合が悪くても言い出せないと知っていたから。
- 2 姫君の屋敷に怪しげな者が出入りしている様子を見かけたから。
- 3 姫君の屋敷で不吉な気配を感じたという人々の訴えがあったから。
- 4 姫君の屋敷の辺りを通りかかったときに不穏な気配を感じたから。

(『別本 八重葎』 改変したところがある。)

問二 — 2 「侍従、頭の毛も立ちて」とあるが、「頭の毛も立」った理由として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 今の今まで無かった手紙や蓮葉が急に出てきて何が起こっているのかも分からず、現実とは思えない事態に驚いたから。
- 2 源氏からの手紙だと思っていたものが実は蓮葉で、変化の者の仕業だということが目の当たりに分かって怖かったから。
- 3 姫君の近くに蓮葉などという不吉なものが置かれていたことに全く気付かず、自らの失態に肝が冷える思いをしたから。
- 4 部屋の中にあつた蓮葉という呪具が姫君の病気を引き起こしていることに否応なく気づかされ、気味が悪かったから。

問三 — 3 「そこたちのものはかなきに」の口語訳として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 あなたたちが頼りないので
- 2 姫君が弱く心細そうなので
- 3 ものが散らかっているので
- 4 どこもかしこも壊れそうなので

問四 — 4 「すくよかにのたまへば」とあるが、このとき阿闍梨が「すくよかに」言った内容として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 狐などは人の心の隙に巧みに入り込み、金目の物をだまし取ったりするから油断してはならない。
- 2 世間では、荒れて人のいない屋敷に狐が出て悪さをしたり、家に乗っ取られたりすることもある。
- 3 姫君の屋敷のような寂れたところでは、狐などに取りつかれたり命を取られたりすることもある。
- 4 目敏い狐は家の様子で人の心を読むので、このように家を寂れさせて人手を減らしてはいけない。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

週に一度、学校の帰りに市民図書館に寄るのがいつの頃からか久志の習慣になっている。

学校にも図書室はあるが、一度に一冊しか借りられず、久志にとっては物足りないことハナハだ^aしいのだ。昼休みに本を借りると夜までには読み終えてしまうので、居室で手持ち無沙汰な時間を過ごすことになる。

その点、市民図書館なら一度に十冊借りられるので、気が向いたときに常に未読の本があるという状態をキープできる。

いろんな分野の棚を覗いて、十冊本を見繕うと一時間ほど経っている。借りるのは小説がメインだが、実用書も何冊か混ざる。学校の図書室には置いていないジャンルなので、意外と新鮮だ。

ハヤブサタロウシリーズを読んでいる流れで、ビジネス書などにも手を出している。ビジネススキルの本を読んでからハヤブサタロウを読むと、また新たな発見があつて面白かったりする。

その日は図書館からの帰り道で、福原とばったり行き会った。

「あら、ヒサちゃん」

見つけたのは福原が先である。

「学校の帰り？」

「うん、図書館に寄ってた」

福原は児童養護施設の会合の帰りで、『あしたの家』に一度寄ってから帰宅するという。

「図書館、よく行くの？」

「週に一回くらいは。カナと一緒に来ることもあるよ」

「そう」

福原は嬉しそうに笑った。そういえば、図書館に初めて連れてきてくれたのも福原だった。

「ヒサちゃんとカナちゃんは、本当に本が好きねえ。二人とも、誕生日プレゼントのリクエストは毎年図書カードだものね」

勉強にも関係あるものだから、と図書カードはいつも一万円分を**フンパツ**^bしてもらえる。子供が本を読むことを喜ぶ福原の計らいもあるのだろう。

しかし、欲しい本を全部買おうと思ったら全然足りない。結果、図書館もフル活用している次第だ。

「大人になって働くようになったら、ハヤブサタロウを単行本で全部そろえるのが夢なんだ」

高校生、しかも施設暮らしの身分では、文庫落ちを待たなくては厳しい。

「ヒサちゃんが読書を好きになってくれて本当に良かったわ。カナちゃんが本好きになったのもヒサちゃんのおかげだし……」

「俺が本読むの好きになったのは先生のおかげだよ」

「ご本を読むのは素敵なことよ。——幼い日の福原の言葉がふと蘇った。

みんな、自分の人生は一回だけなのに、ご本を読んだら、本の中にいる人の人生もたくさん見せてもらえるでしょ。

先生たちだけじゃなくて、本の中の人もヒサちゃんにいろんなことを教えてくれるのよ。

素敵ねえ。

「俺、小さい頃、本を読むのは物知りになれるから素敵なんだと思ってた」

「そうね。それも素敵なことよ」

それも、と言うことで福原は他にもあると示している。

「今は、いろんな価値観を知ることができるから素敵なのかなって」

「そうね。それもきつと」

「正解って、何だったの？」

「どれが正解っていうのはないのよ、きつと」

福原はそう言って笑った。

「本を読んでよかった、と思うことがあったら、それが全部正解なの」

「うん、分かるよ。分かるけどさ」

¹ 久志は食い下がった。

「でも、『あしたの家』に来たばかりの俺に、先生が本を読むことを薦めたのは、何でだったのかなって」

久志は『あしたの家』に来る前のことをあまり覚えていない。記憶に霽^{もや}がかかったみたいで、上手く思い出せないのだ。今では両親の顔も忘れてしまった。

大風のような怒号と暴力が過ぎ去るのをただ待って、待って、待って……ある日、いきなり暴力がやんだ。近所の人の通報で児童相談所が強制保護に

踏み切ったのだ。その事情を知ったのは、ある程度大きくなってからである。

いくつか施設を転々として、最後に来たのが『あしたの家』だった。

ぼーっとしていても誰にも殴られないので、安心してぼーっとしていた。

ただ息することに没頭していられるのが嬉しかった。保護されるまでは、呼吸はいつか必ず激しい暴力に邪魔された。暴力の合間を縫うように、生きていくのに必要な呼吸を遠慮しいいさせてもらうという感じだった。

『あしたの家』では何度か検査やテストを受けた。あまりにもぼんやりしているので、職員たちが知能の遅れを心配したらしい。命の危険が去ったことで、安心のあまりキョダツ状態だったのだろう。久志はその頃の自分の状態をそう判断している。

そんなキョダツ状態の子供に、福原が本を読むことを薦めたのは何故だったのか、それはずっと心の隅に引っかかっていた。

久志の問いに、福原は困ったように笑った。

「ちつとも根拠のある話じゃないのよ。ただ、先生の古いお友達が、本を読むことで救われてたんじゃないかと思って……先生の幼なじみだったんだけど」
幼なじみは上に兄が二人いる長女だったという。

「お父さんが、お酒を飲んで暴れる人だったのよ。それもちよつと酷い暴れようでね。お母さんが生活を支えて、施設には入ってなかったけど……本当は、施設に入ったほうが危なくなかったんじゃないかと思うわ。彼女が高校生のときにお父さんとお母さんが離婚して、子供はお母さんが引き取ったんだけど」

福原の目に暗い影が差した。

「ヒサちゃん、虐待の連鎖って分かる？」

久志は黙って頷いた。まるで怖いものを紐解くように、幼児虐待についての本は、何冊も読んだことがある。——きっと奏子も。

親に虐待されて育った子供が、自分が大人になって子供を持ったときに、親を生き写したように虐待に走ってしまう。虐待を受けて育った子供にとっては、下手な怪談よりも恐ろしい ア が、本にいくつも載っていた。

「先生の幼なじみも……？」

「ううん。いい人に巡り会って、幸せな結婚をしたわ。彼女の下のお兄さんも、最初の結婚こそ失敗したけど、二度目は円満で」
では消去法で上の兄だ。——虐待の連鎖に捉まったのは。

「上のお兄さんは、お父さんそっくりになったって。彼女が嘆いてたわ。嫌なところがどんどん父親に似てくるって。お兄さんの奥さんは言わないけ

ど、暴力も……」

「子供はいるの？」

「幸い、いなかったけど」

² 子供に恵まれないことを幸いと言わなくてはならないのは、とても惨めなことだ。——暴力を振るう当人に自覚がないとしても、惨めで悲しいことだ。

「先生ね、彼女ととても親しかったの。おうちにもよく遊びに行って……お互い本を読むのが好きだったから、本の貸し借りもよくしてて、図書館にも一緒に行って」

まだ、虐待の連鎖と読書がどう繋がるのか分からない。久志は無言で歩きながら、続きを待った。

「下のお兄さんも本が好きで、彼女の家に遊びに行くと、よく本の話で盛り上がったの」

そして福原は照れくさそうに笑った。

「先生、そのころ詩を書くのが好きでね、雑誌にトウコウ^dしたりしていたの。たまに掲載されることがあって、そしたら彼女も下のお兄さんもすごく喜んでくれて……」

もしかしたら、その下のお兄さんのこと好きだったのかな。はにかんだ福原の笑顔にそんなことを思った。

「でも、上のお兄さんは、全然本を読まない人だったのね。先生の詩が雑誌に載ったことはすごいなって喜んでくれるけど、載った詩には全然興味が無い感じで」

兄妹三人、条件は同じはずだった。何故、長男だけが連鎖に捉まったのか。

「先生には、下の二人が本好きだったことが無関係には思えないの。彼女ともそんな話になったことがあるけど、そうかもねって……」

私と下の兄は、本に救われたのかも。幼なじみはそう言ったという。

「人生は一人に一つずつだけど、本を読んだら自分以外の人の人生が^X体験できるでしょう。物語の本でも、ドキュメンタリーでも。そうやって、他人の人生を読んで経験することが、自分の人生の訓練になってることがあるんじゃないかって、先生は思うのよ。踏み外しそうなときに、本で読んだ言葉が助けてくれたりとか……」

³ 胸にぽつりと雨粒のように安堵が降った。——それが、じわじわと手足の先にまでしみわたっていく。

だったら、俺とカナは大丈夫だ。

「ロールプレイの訓練ってあるでしょう」

虐待防止訓練の「イッカン」^eとして取り入れられている手法だ。虐待が発生する状況を設定し、当事者の役割を演じることで、虐待を回避する能力を高める訓練である。状況や他者への想像力を培うことが重要な目的だ。

「本を読むと、自然に想像力が培われるんじゃないかと思うのよ」

「どんな本を読むのがいいのかな」

久志が尋ねると、福原はにっこり笑った。

「きつと、何でもいいのよ。楽しく読んだものは、全部自分の」イになるわ。ゾロリンもハヤブサタロウも」

ああ、そうかと腑に落ちた。

ゾロリンやハヤブサタロウに感情移入して、ドキドキハラハラ、泣いたり笑ったりしたこと全てが、自分の心を耕してくれているのだ。

「……だから、本は大事にしなくちゃいけないんだね。自分が好きな本も、他の誰かが好きな本も」

どの本を読めば救われる、なんてことは決まっていない。誰に何が響くかは読んだ本人にしか分からない。

だから、どの本も大事にしないといけないのだ。どの本も、誰かを救う可能性がある。

本を読むのは、——確かに素敵だ。

いつかカナにも教えてやろう。

「先生、俺、夢がいつこ増えた」

思いついて、自然と顔がほころんだ。なあに、と福原が柔らかに尋ねる。

「大人になって働くようになったら、俺の好きな本は必ず二冊買うんだ。そんで一冊『あしたの家』に送ってあげる」

⁴ 福原はすぐに答えなかった。

「あれ？ 嬉しくない？」

福原は無言で激しくかぶりを振った。もう孫がいてもおかしくない年齢なのに、そんな仕草をすると少女のようだ。

「じゃあ、それまでに娯楽室に大きな本棚を買っておかないとね」

そう言った福原の目元はにじんでいて、笑顔が眩^{まぶ}しいほどだった。

（有川浩『明日の子供たち』 一部改変したところがある。）

問一 — a、e に相当する漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a ハナハだしい

- | | | | |
|---|-------------|---|------------------|
| 1 | 海の幸をタンノウする。 | 2 | 御一緒にきてコウジンに存じます。 |
| 3 | 考え方がキョクタンだ。 | 4 | ジンソクな対応が必要だ。 |

b フンパツ

- | | | | |
|---|-----------------|---|----------------|
| 1 | 温かいフンイキが好きだ。 | 2 | 不満がフンシュツする。 |
| 3 | 試合に勝つためにフントウする。 | 4 | 急な規格変更にフンガイする。 |

c キョダツ

- | | | | |
|---|---------------|---|-------------|
| 1 | 現実とキョコウ。 | 2 | テンキヨ届を出す。 |
| 3 | 神奈川県にキョテンを移す。 | 4 | 新体制をキョゼツする。 |

d トウコウ

- | | | | |
|---|---------------|---|------------|
| 1 | 挿絵のコウセツは問わない。 | 2 | ゲンコウを提出する。 |
| 3 | 記事をコウエツする。 | 4 | 雑誌をハツコウする。 |

e イツカン

- | | | | |
|---|----------------|---|--------------|
| 1 | カンレキを迎える。 | 2 | カンビな歌声が聞こえる。 |
| 3 | 空気のジュンカンをよくする。 | 4 | カンサン期の観光地。 |

問二 ———— ・に入る語句として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 1 用例
- 2 凡例
- 3 事例
- 4 典例

- 1 糧
- 2 盾
- 3 鏡
- 4 術

問三 ———— X 「体験」の に入る漢字二文字を、この後の本文の内容を参考に答えなさい。

問四 ———— 1 「久志は食い下がった」とあるが、この場面の「久志」の心情説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 福原は「それも」と含みをもたせながらも自分の考えをはっきりと言わないが、施設に来たばかりの頃に放心状態だった久志に本を勧めた福原には読書に対する特別な思いがあると考え、その思いを聞き出したいと考えている。

2 福原が久志の考える読書のよさを聞いても「全部正解」と言うのは、福原を慕って考えを伝えた久志を子ども扱いしており、真剣に対話をしてもらえていないように感じられるため、本音を聞き出したいと考えている。

3 福原が久志の読書に対する考えを聞いても曖昧な返事しかしないのは、読書によって知識が増えたり様々な価値観を知れたりするという久志の考えに賛同していないからだと考え、福原の反論を聞き出したいと考えている。

4 福原は「どれが正解っていうのはないのよ、きっと」と言うが、久志や奏子^{かなこ}に本を勧めた彼女は、施設の子供に読書を勧めることで何か利益を得ようとしているのではないかと考え、その狙いを聞き出したいと考えている。

問五 ———— 2 「子供に恵まれないことを幸いと言わなくてはならないのは、とても惨めなことだ」とはどういうことですか。「とても惨めだということ」に続くように、八十字以内で書きなさい。

問六 ——— 3 「胸にぼつりと雨粒のように安堵が降った。——それが、じわじわと手足の先にまでしみわたっていく」とはどういうことを説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 虐待の連鎖の話について、かつて暴力を受けていた奏子の将来を思って緊張して聞いていたが、読書が虐待の連鎖を断ち切る可能性の話聞いて、奏子を救うために動き出そうと思え、緊張が和らいだということ。

2 三兄妹の長男だけが虐待の連鎖に捉^{つか}まった話を緊張感をもって聞いていたが、同じ親の元で育った兄弟でも必ずしも全員が同様に虐待の連鎖に捉まるわけではないことが分かったので、自信がもてたということ。

3 虐待を受けていた三兄弟のうち長男は虐待の連鎖に捉まったという話を自分の過去を思い出して緊張して聞いていたが、好きで読んでいる本が虐待の連鎖から自分を救うと知り、一気に不安が解消されたということ。

4 虐待の連鎖に捉まった人物の話を他人事とは思えず緊張して聞いていたが、読書は道を踏み外しそうなときに人を救ってくれると聞いて希望が見え、自分のような人間は大丈夫だという安心感が広がったということ。

問七 ——— 4 「福原はすぐに答えなかった」とあるが、この場面の「福原」の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 久志が、将来好きな本を二冊買って「あしたの家」に送ってくれると聞き、子供たちの未来を考えられるほどに久志が成長していたことに気づき、その変化に戸惑って何と答えてよいか分からなくなっている。

2 久志が、本を将来「あしたの家」に送ってくれると聞き、久志自身が虐待の連鎖から逃れるだけでなく、「あしたの家」に住む子供たちの将来も救えるような提案をしたことに感動し、言葉に詰まっている。

3 久志が、将来好きな本を二冊買うことが夢だと言ったのを聞き、「あしたの家」に来てから気力に欠けていた久志が、読書という趣味を通してやっと夢を見つけれられたことに喜びを感じ、言葉を失っている。

4 久志が、嬉しそうな顔で将来好きな本を二冊買うという夢を話すのを聞き、読書を通して子供たちの将来を救えるかもしれないということが、久志にどれだけ希望を与えたのかに気づき、啞然としている。

問八 ~~~「そうね。それも素敵なことよ」とあるが、福原は読書に対してどのような考えを持っていますか。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 読書には、自分が幼少期に育ってきた環境を引きずらずに新たな生き方を選択できるようにする力があると考えており、想像力を掻き立てる本に出合えるような読書をするとういと考えている。
- 2 自分とは異なる価値観をもつ人物の人生を描いた小説を好んで読むことで、たとえ苦しい幼少期を過ごしたとしても負の連鎖に陥ることなく新たな人生を自分の手で切り開けると考えている。
- 3 本を楽しく読んで理想的な人生を体験することが読書の一番の魅力であり、特に久志のような虐待を受けたことのある子供たちが将来加害者側にならないために読書は効果的だと考えている。
- 4 生きていく上で、読書を通して得た言葉が拠り所となり、虐待の連鎖を断ち切れるので、読書はロールプレイ同等に「あしたの家」で暮らす子供たちにとって有効な訓練だと考えている。

問九 「久志」について、本文から分かるこの人物の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 久志は、実用的な書籍は将来役に立つと思い、小説の他にビジネス書も読むようにしていたが、福原のおかげで自分が好きで読んでいた小説も自分自身を救う可能性があることに気付いた。
- 2 久志は、福原の影響で本を好きになったが、福原がどんな本も自分の心を豊かにすると言ったのを聞いて、大人になったらハヤブサタロウの単行本をそろえたいという夢も見付けることができた。
- 3 久志は、施設にきた直後、暴力におびえずに生きられることに安心して気力をなくしていたが、福原のおかげで本の登場人物に感情移入する素晴らしさに気付き、熱心に本を読むようになった。
- 4 久志は、「あしたの家」に来る前の記憶が鮮明ではなく、両親の顔も覚えていないが、自分や奏子のような虐待を受けていた子供がどのような人生を歩むことになるのか、将来を憂いていた。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今日の講演のタイトル「建築という暴力」を見て、いったい私が何を話すんだろうと思われる方もいるかもしれませんが。どんなに優しい身振りの建築でも、その建築が実現される過程は断定の連続です。そしてその断定のメカニズムは実は極めて **A** です。空間的な決定のメカニズムが、それに先立つと **B** に思われているプログラムそのものをも決定していると私は思っています。その **A** な決定の、あるいは断定のメカニズムについてお話できたらと思っています。

ある雑誌に、若い建築家が「プログラムが最近はやリ言葉になっている」と書いていましたが、プログラムは別に流行したりすたりするものではありません。われわれが建築をつくるときに、その背景にプログラムを持っていない限り建築をつくってはいけません。今、問題になっているプログラムとは、プログラムそれ自体が問題なのではありません。むしろ「建築とプログラム」の関係がわかりにくくなってきているのではないかと思います。というわけで、今日は建築がどのように記述されてきたか、¹ どのようなものとして建築を眺めてきたかについて、私の理解するハンイ^aで **C** ではありますがお話します。

社会的なさまざまな制度や出来事などをわれわれが注意深くゲンミツ^bに受け止め、それをそのまま建築に反映していくのだと素朴に信じられていたのが、一九五〇年代までの建築のつくられ方だったように思います。

それに対して六〇年代以降になると「私の意図」ということがテーマになってきたように思います。建築家の構想、つまり「私はこういう意図」を持つて建築をつくっていくのだということです。自分の意図はどのように表現できるのだろうか、ということが中心になっていったような気がします。私の意図なり、私の固有の言語、私がいいと思うものはほかの人にも共感してもらえるというゲンソウ^cがあった。自分が思っていること、自分が意図することを人にデンタツ^dできるんだ、と考えていたと思います。例えば磯崎新さんが「建築の解体」といったとき、磯崎さんに固有の言語が決定的に重要な意味を持ったのだと思います。

その一方で、林昌二さんは「建築は社会によってつくられる」といつていたように思います。建築は社会によってつくられるのだから、もし建築にプログラム上の欠陥があるとしたら、それは社会の機構そのものがどこかでおかしくなってきたのだ、と。たまたまそのとき『新建築』の月評を担当していたので林さんの発言はよく覚えてます。過激派が爆破事件などを起した頃でした。銀行の計算センターが要塞のようなものにならざるを得なくなっていくのは、社会の側に問題があると。つまり、そういう爆破事件を起すからケンロウ^eな計算センターをつくらざるを得なくなってくるわけです。私は、「社会に開かれた計算センターなんてどこにあるんだ」と反論しました。「個々の住宅よりもオープンスペースのほうがさらに重要だ」とも林さん

は書いていましたが、「それでは、そういう個々の住宅よりも重要であるようなオーブンスペースというものを実際に見せてくれたことがあるのか」と²生意気なことをいった記憶があります。林さんの「社会が建築をつくるのだ」という話は、私的な言語に対する批判でもあったと思います。

一方に〈私的な言語〉があり、他方に〈社会にかかわる言語〉があり、そのふたつがなかなかうまく噛み合っていないという感じが当時私はしていました。私的な言語が共感を得るようなメカニズムがどうなっているのか。あるいは社会にかかわる言語が私的な感性とどうかかわることができるのか。そのあたりが自分でもよくわからなかった。そのふたつの側面は未だにうまく調停できていないようにも思います。例えば、私よりも幾分か若い建築家のつくっている最近の住宅を見て思うことは、見えがかりというか、場面というか、シークエンスというか、そういうものがたいへん上手です。この角を曲がると壁がこんなふうに見えて、光が上からこう落ちてきて、と全体がいかにも舞台やショールームのようです。住宅という生活にかかわるはずだった器がその生活のすべてを飛び越えて、生活自体をもはや基礎に住宅をつくる必要がないといった感じですが。実際にそういったことを書いている方も多いようです。確かに一理ある^アと思います。社会と建築の関係といったところで、例えば、ひとつの家族のためにひとつの住宅をつくるということでもリァリティーがない。六十年代、七十年代の家族に対して十分な信頼感があった時代とは確かに違う。家族自体が変質してしまっているわけですから。

両親に子供、という家族の揺るぎない単位があることを前提にして住宅をつくってもまったく意味がない。家族が生活の単位としてもはや成り立っていない。破綻しているといってもいい。そんなときに、家族を中心として住宅を考えることに、私もあまり意味を認めません。といって、生活³といっさい関係なく住宅³がつかれるかというところ、そうではないと思います。

もし家族が破綻しているとすれば、今までの家族に替わるプログラムはどうなるかということになります。そこを落としてしまうと、単純にシークエンスだけに置き換ってしまいます。もう家族はいらないんだ、と。生活に関しては、設計者がそれぞれ勝手に描くことができる。そうすると、住宅はまさに舞台になるし、ショールームのようになっていくと思います。雑誌の中で見るレベルの高い住宅と思われるものは特にそのような感じがします。住宅だけでなく、公共建築にしても商業建築にしても、最近の建築は周辺の風景との関係を強く表現する傾向にあるように思います。建築のさまざまな側面を周辺との関係に置き換えてその関係こそが建築の中心課題であるといったような方法です。もちろん周辺環境との調和は重要ですけど、それだけで建築が記述できるとは思いません。

私の立場は今述べてきた考え方と違います。

社会が建築をつくるわけではありませなし、私的な言語だけで建築を語ることもできません。建築は風景論あるいはシークエンスだけで語れるものではありません。そうした建築の語り口というのは、当の建築の根拠を説明しようとしているのだと思いますが、私があえて「暴力」というのは、⁴建築には実は根拠などどこにもないのだということをいいたいです。その建築が出来上がるにあたっては、その建築を成り立たせるための根拠があらかじ

めあるはずだと私たちは思っている。そう思うほうが B ですけど、でもそんな根拠があって建築ができあがっているわけでは必ずしもありません。不動の根拠があるわけではなくて、単に仮説があるに過ぎないと思います。建築をつくるということは仮説に基づいてつくっている。そしてその仮説に根拠を与えるものが建築です。つまり逆転しているわけです。根拠というのは、別の言い方をすれば社会的なプログラムです。プログラムと呼んでいるものが建築に先立って存在し、それをわれわれが受け止めて建築をつくる、という広く受け止められている構図ではなく、建築という空間的な構成のあり方がプログラムに根拠を与えているのです。

例えば空間概念をすべて排除したところでプログラムを描けるか、と問いかけてみればいいと思います。私はすごく難しいと思います。例えば、家族という関係を説明しなさい、あるいは将来的なプログラムを描きなさいといわれたとき、住宅という空間のイメージをはずしてプログラムを描くことは難しいと思います。

美術館はどうでしょう。美術館の中では絵が壁に掛けられ彫刻が置かれるのは当然だと思います。あるいは、さまざまな建築プログラムはすでにあらかじめあるビルディング・タイプを前提にして組み立てられているように思います。例えば学校なら、今ある学校という建築が前提にあってその建築との関係で教育というプログラムが稼働しているようにも思います。

しかし今、優れた美術の作品というのは多かれ少なかれ美術館という枠組みからどんどん出ていっています。クリストのように島全体を覆うこともあります。美術というハニイが限りなく広がっているように思うのです。ところが、美術館のプログラムは相変わらず絵画を掛け、彫刻を置くという視点でできています。ですから、逆にそうした視点によって評価される作品だけが美術館に展示されるという構図が出来上がってしまうのだと思います。つまり美術という枠組みを美術館という建築が決めている。そういう X した構図自体を「暴力」というふうに呼んでいいのではないかと考えているわけです。

美術館をつくるということは、ひょっとしたら美術という枠組みを決めているのかもしれない。学校をわれわれがつけることは、学校という教育システムをそこで決めているのかもしれない。空間がそのプログラムをどこかで決定的に決めてしまっているのではないかと、私は思っています。

それはどんな建築にもいえると思います。ある文化を切り取って建築の中に入れることができるはずがないのにそれでも博物館のような建築がある。その建築の中に展示品が飾られることによってその展示品が逆にある文化を代表しているように見えるという構図が出来上がっているように思います。切り取られてそこにあることが当然であるかのように見えるんじゃないかと思っています。

そのように建築は、そこにあることがいかにも当然であるかのように見せていく力がある。住宅をつくれば、そこに当然のように家族が見えてくるだろうし、美術館が出来上がると、そこに飾られている美術作品がいかにもある価値を持ったものとしてそこにあるように見えてくる。つまり、そういうことを私はあえて「暴力」と呼びたいのです。飛躍があるかもしれませんが、建築はあるものに決定的な価値を付与しているのです。それは住宅を一軒

つくっても、集合住宅でも、あるいは文化施設をつくっても同じです。

(山本理顕「建築という暴力」 一部改変したところがある。)

※ クリスト…人名。現代芸術家。

問一 ——— a～eに相当する漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a ハンイ

- | | | | |
|---|------------------------------|---|-----------------------------|
| 1 | 彼女は <u>そのハンケツ</u> に納得できていない。 | 2 | 月の <u>ハンケイ</u> は一七〇〇km以上ある。 |
| 3 | 剣道の <u>シハン</u> になることを目標にする。 | 4 | 彼は新しい税制に <u>ハンタイ</u> している。 |

b ゲンミツ

- | | | | |
|---|---------------------------|---|------------------------|
| 1 | 締め切りの日時を <u>ゲンシユ</u> する。 | 2 | <u>ゲンジョウ</u> の変更は難しい。 |
| 3 | 遅刻は <u>ゲンソク</u> には認められない。 | 4 | <u>ゲンロン</u> の自由を保証される。 |

c ゲンソウ

- | | | | |
|---|----------------------|---|----------------------|
| 1 | <u>ソウベツ</u> 会に出席する。 | 2 | 幼少期を <u>カイソウ</u> する。 |
| 3 | 彼の <u>エンソウ</u> は素敵だ。 | 4 | <u>ソウソウ</u> に退散する。 |

d デンタツ

- | | | | |
|---|-----------------------------------|---|-------------------------|
| 1 | 南東を <u>タツミ</u> の方角という。 | 2 | 気候変動で <u>タツマキ</u> が増えた。 |
| 3 | 植木の <u>手入れ</u> で <u>キャタツ</u> を使う。 | 4 | 祖父は書道の <u>タツジン</u> だった。 |

e ケンロウ

1 ケンシンの的に介護をする。

2 経済はケンチョウな伸びを示している。

3 ケンキュウには失敗がつきものだ。

4 お互いのケントウをたたえあう。

問二 ——— ア・イの語句の意味として文中において最も適するものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

ア 「二理ある」

1 自らの考えを改め、全面的に賛意を示すということ

2 相手の意見に感心し、異論をはさまないということ

3 全ては認められないが、一部は納得するということ

4 対話によって、一定の妥協点を見つけるということ

イ 「飛躍」

1 論理や考えが正常な段階を踏んでいないこと

2 大きく高く飛ぶようにめざましい活躍をすること

3 正しい順序や段階を無視し逆行してしまうこと

4 急激な速さをもたなって発展し進出していくこと

問三 [A] [C] に入る語句として、最も適する組み合わせのものを、次の各群の中から一つ選び、番号で答えなさい。なお、同一の空欄には同

じ記号が入ります。

1 [A] 一方的

[B] 特殊

[C] 体験的

2 [A] 一方的

[B] 一般的

[C] 体験的

3 [A] 相互的

[B] 特殊

[C] 感覚的

4 [A] 相互的

[B] 一般的

[C] 感覚的

問四 ——— 1 「建築がどのように記述されてきたか、どういうものとして建築を眺めてきたか」とあるが、これに関係する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 時代の流れの中で建築は社会情勢や個人的な感覚、あるいは社会との相関性などをテーマにしてきたが、近年のシークエンス的建築や風景との調和を目指す建築において、筆者は六十年代までの建築には存在した人間同士の共感が失われていることを指摘し、将来の建築を不安視している。

2 五十年代の建築は当時の社会的事象をそのまま反映したものだったが、六十年代に入ると「私の意図」をテーマにした個人的な建築と「建築は社会によってつくられる」という五十年代の建築理念を継承したものの二つに大別されたが、筆者は前者の個人的建築を好ましい建築と捉えている。

3 六十年代には建築家の個人的考えをテーマにした建築と、社会との相関関係をテーマにした建築が隆盛を迎えるが、筆者は両者がうまくかみ合っていないと感じており、「私的な言語」への共感や「社会的言語」と私的感性の関係を調和する手段として、次代の風景論的建築を提唱している。

4 かつては社会的な制度や出来事を反映させるかたちで建築は記述されてきたが、六十年代以降は「私的な言語」や「社会にかかわる言語」に基づく建築に移行していき、さらに近年においては周辺の環境や景色との調和が重視されているが、筆者はどの考えにも完全な賛意は示していない。

問五 ——— 2 「生意気なことをいった」とあるが、なぜか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 「建築は社会によってつくられる」という林昌二の建築理念は、同時代状況への問題意識とともに個人の意図によって建築は決定されるという磯崎新たちの考えを批判する批評的な建築論だったが、当時の筆者はこのような観念的な発想に強い反発を覚え、見当違いの抽象的反論を行ったから。

2 林昌二は自らの建築理念として同時代における個々の人々の声に応じて建築を変容させていく「建築は社会によってつくられる」を掲げていたが、筆者はそれがあくまでも理念であることを理解せずに繰り返し実際の建築そのものを要求しており、林の思索的な側面への認識が欠けていたから。

3 林昌二の「建築は社会によってつくられる」という建築論は当時の社会の問題点を指摘するとともに、私的な意図や言語が建築のテーマとして中心化していくことへの批判であったことに当時の筆者は気がつかず、実際に林の考えに沿った建築の有無という表層的な部分を問題にしていたから。

4 〈私的言語〉と〈社会にかかわる言語〉の調和を目指していた筆者にとって林昌二の「建築は社会によってつくられる」という発想は〈私的言語〉を否定しているように捉えられ、反論を繰り返したが、林の考えは〈私的言語〉への批判であり実際の建築そのものは問題にしていなかったから。

問六 ——— 3 「生活といっさい関係なく住宅がつかれるか」というと、そうではないと思います」とあるが、これに関係する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 舞台やショールームに近い最近の住宅設計の根底には生活の消失によって欠落した建築の基礎を埋めようというプログラムがあり、その結果リアリティや温かみに乏しい住宅が増大し、ますます家族の関係性は希薄化していくことになった。
- 2 家族という生活単位が成立しない現代社会において、家族を中心とした住宅作りに意味はあまりないが、だからといって家族に代わる生活のプログラムなしにシークエンスや環境との調和で建築を記述していくことを筆者は肯定していない。
- 3 かつては家族という生活単位に十分な信頼関係を持って建築のプログラムを設定できたが、時代の流れの中で家族は変質してしまい、現代では建築の場面性や周辺環境との関係性を家族に代わる生活単位とした住居が主流となっている。
- 4 若い建築家たちは家族関係が破綻した現代的な住宅作りを盛んに行っているが、これらは一見生活とは無関係に見えて実際は設計者個人の〈私的言語〉という生活レベルが基礎にあることを筆者は指摘しつつも、その価値を認めてはいない。

問七 ——— 4 「建築には実は根拠などどこにもないのだ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 広く受け止められている建築の考え方は社会的なプログラムが建築に先行して存在し、そのプログラムに従って建築がつけられていくという構図を持つ。だが実際は建築や住宅のイメージがあつて、そのイメージが仮説に過ぎない建築していくものの方向性に根拠を与えていくということ。

2 社会的なプログラムが建築に先立って存在しており、建築家はそのプログラムに基づき建築を記述していくという広く知られた構図は誤りである。実際にはプログラムは存在せず、まず建築やそのイメージが存在しており、そこからさかのぼって創作的に根拠付けがなされているということ。

3 確固とした根拠を持つ建築の設計図はそもそも存在せず、あるのは明確ではない仮説だけである。この仮説に基づいて建築を記述する作業を通じて、建築の空間イメージが仮説に、その仮説が建築にと相互的に修正や反省を強いることで根拠と建築のゆるぎない構図が生まれるということ。

4 多くの人が当然のものと捉えている建築に先立つ根拠Ⅱプログラムはそもそも存在せず、より根拠の薄弱な仮説によって建築はつくられる現実がある。この流動性を持った仮説を積み重ねていくことによって、不動産の根拠が形成されていくプロセスを多くの人は見過ごしているということ。

問八

X

 に入る、最も適切な語句を次の中から選び、番号で答えなさい。

1 進歩 2 相似 3 超越 4 逆転

問九 本文の表題は「建築の『暴力』」だが、筆者はなぜ「建築」は「暴力」であると考えてのか、八十字以内で書きなさい。

問十 本文の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 「プログラム」とは建築に先立つ建築の方向性や理念等のことである。本文では「プログラム」と「建築」の関係が近年は明確ではなくなっていることを指摘し、また世間では前者が後者に比べて優位かのように考えている人がいることを筆者は紹介しているが、筆者自身は「プログラム」の優位はないと述べている。

2 本文ではまず、「建築とプログラム」の関係という点から日本の「建築」がどのような「プログラム」に基づいて形成されてきたかを提示した後、筆者の主張「建築の暴力性」を明細に説明することで、今までの「プログラム」を否定し、新たな「プログラム」である「暴力」の有用性を多角的な視点から検証している。

3 美術の意味を美術館という建築が決定しているという本文の主張は、引用されているクリストの作品のような美術館の外で展開される美術にはうまく当てはめることができず、そういった現代美術をも内包するような新しい形態や発想をともなった美術館の「プログラム」が将来的には必要であると筆者は訴えている。

4 建築とは本文中で「暴力」と述べられているように断定的で非対話的な営みであると筆者自身は考えており、建築とその他の諸要素の対話のなかで生成される「プログラム」によって記述されてきた同時代状況や個人の言語、あるいはシークエンスや風景的な建築は現代では乗り越えられる過去のものとして定義している。

(問題は、これで終わります。)

